

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	スマイルroom八柱駅前教室		
○保護者評価実施期間	2025年 12月 18日		～ 2026年 1月 20日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	50名	(回答者数) 43名
○従業者評価実施期間	2025年 12月 18日		～ 2026年 1月 20日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7名	(回答者数) 7名
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 18日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	個別療育を中心に、お子様一人ひとりの発達段階や特性に応じた支援を行っており、全職員が関わることで多角的な視点からの支援が可能となっている。また、個別支援計画に基づいた継続的な療育により、着実な成長を促す体制が整っている。	職員間でお子様の様子や支援内容の共有を密に行い、担当者に依存しない支援体制を構築している。また、保護者やお子様のニーズを丁寧に聞き取り、柔軟に療育内容へ反映させることで、個々に最適化された支援を実施している。	職員間での療育見学や研修機会を充実させ、専門的な知識や支援技術の向上を図る。また、小集団療育における個々の学びの分析を進め、個別支援との相乗効果を高めていく。
2	療育後のフィードバックや日常的な対話を通して、保護者との信頼関係を大切にしており、お子様・保護者・職員の三者が連携した支援体制を構築できている。また、相談しやすい環境づくりにより、継続的な情報共有が可能となっている。	療育後のフィードバック時間を確保し、日々の様子や課題について丁寧に共有している。また、保護者からの相談に対しては寄り添った対応を心掛け、必要に応じて面談等の機会を設けている。伝え方にも配慮し、できている点と課題のバランスを意識している。	保護者からの相談に対する対応力向上のため、事例共有や対応内容の記録化を進め、職員全体での対応力の底上げを図る。また、より専門的な視点からの助言ができるよう研修等を通じてスキル向上を目指す。
3	職員間のコミュニケーションを重視し、日々の情報共有が円滑に行われているため、支援内容の統一や連続性が保たれている。また、職員それぞれの強みを活かした支援が実現できている。	些細な変化も含めて情報共有を行い、療育の質の均一化を図っている。また、前回担当者からの引き継ぎや相談を徹底し、支援の途切れや齟齬が生じないようにしている。加えて、保護者とのやり取りの内容も職員間で共有している。	情報共有内容の記録化や見える化を進めることで、より正確で継続的な支援につなげていく。また、職員同士の療育見学や振り返りを通して、実践的な学びを深めていく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	職員の経験年数に差があり、特に対応が難しい場面において支援の質や対応力にばらつきが見られることがある。また、保護者対応について責任者に依存する傾向がある。	経験年数の浅い職員や他業種からの転職者が多く、専門知識や実務経験の不足が一因となっている。また、対応を任せる機会が少なかったことにより、実践経験が蓄積されにくい状況がある。	研修の充実やOJTの強化により、基礎知識および対応力の向上を図る。また、実際の対応場面を振り返る機会を設け、段階的に対応を任せることで経験の蓄積を促進し、職員全体のスキルの底上げを目指す。
2	個別療育が中心であるため、SST等で学んだ内容を実生活や集団の中で実践する機会が限られている。また、地域交流やイベントの機会も少ない状況である。	個別療育を主軸とした運営形態であることに加え、イベント形式の機会が少ないことが影響している。	小集団療育やイベントの機会を計画的に設け、実践の場を増やしていく。また、保護者へ集団療育の提案を行い、参加機会の拡充を図る。
3	施設が2階にあり階段のみでの移動となるため、身体的配慮が必要なお子様の利用に制限がある。また、教室ごとの環境差(明るさや見え方等)がある点も課題である。	建物構造上の制約により、設備面での改善が難しい部分がある。	利用時の配慮(教室配置や動線の工夫、環境調整等)を徹底し、可能な範囲で利用しやすい環境づくりを行う。また、保護者への事前説明を丁寧にを行い、理解を得ながら運営していく。